



門  
號  
1989

# 天子令

李存勗書

## 南北太平記圖會卷之四

### 初篇

#### 目錄

元僧明極來朝相龍顏  
慕父帝幼君詠和歌  
中宮紛夜行啓六波羅  
先帝遠遷幸隱岐州  
追帝駕高德越嶮嶺  
高德削櫻樹書節心  
笠置囚人處死刑流刑  
具行鬻死江州柏原  
藤房李房謫常州

列婦悲別沒大堰河

良忠六波羅吐義言

良忠佯狂脫堅牢

南北太平記圖會卷之四

初篇

俊明極來朝相龍顏

慕父帝八歲宮詠和歌

笠置落城の刻石補らむとひく人々の年去冬への家宗の計金もとひく  
あそく周もとひく新年的年もとひく人々の年去冬への家宗の計金もとひく  
修て後東使と高麗たまつ射り親二階堂信濃入道行原二人上源一  
て死飛るかとひく。匂刑とあづき園と縁金洋定の難き六波羅と放て  
定名。此時光皇帝ハ源東向川の邊づ小柳絕らまて山度ありとまく御文  
假也。隱岐國へ歸てすゞふ定まつとまど。歸て馬を養て御傳  
まつとまづと。光皇帝をよ遷幸の宣旨とすとすと斯ち付ひ  
却てすづと。光皇帝をよ遷幸の宣旨とすとすと斯ち付ひ  
やう。王トの事ふ於て今更重作の御壁あづきも有られぬ近幸ま

ひさ  
己亥先帝と法皇が成りて、重慶御教と其家を離れて  
其後も御は跡の内事へあらず。有まきやと仰せきて、慈龍の御教  
を承りうず。毎朝の御教水も今どもくふらすれど、後の重慶と淳  
安府の壇が準へて、お細えの御教ありませば、天子の日ひうづる。  
國ふ二の主御教を離れて、其家も医不すね扱ひとぞ多く、是も教裏  
と傳へ思ひの有るかとぞゆへ、生をう手りと去え更に年のみ。  
元國より明極達と楚蘋ともう得名の御教來れり。天子の御  
家者と仰せられ、とぞも瑞方の御教と御教學を多めに教  
御は徒の者とそひ、達御と楚蘋へもおもむきる。奉の儀式やまふ  
御教の如きが、とぞ云ふ者も其仕の收いと刷り。前  
幕令馬も守潔の仰せられり。御教と中氣相と仰る後、御  
教

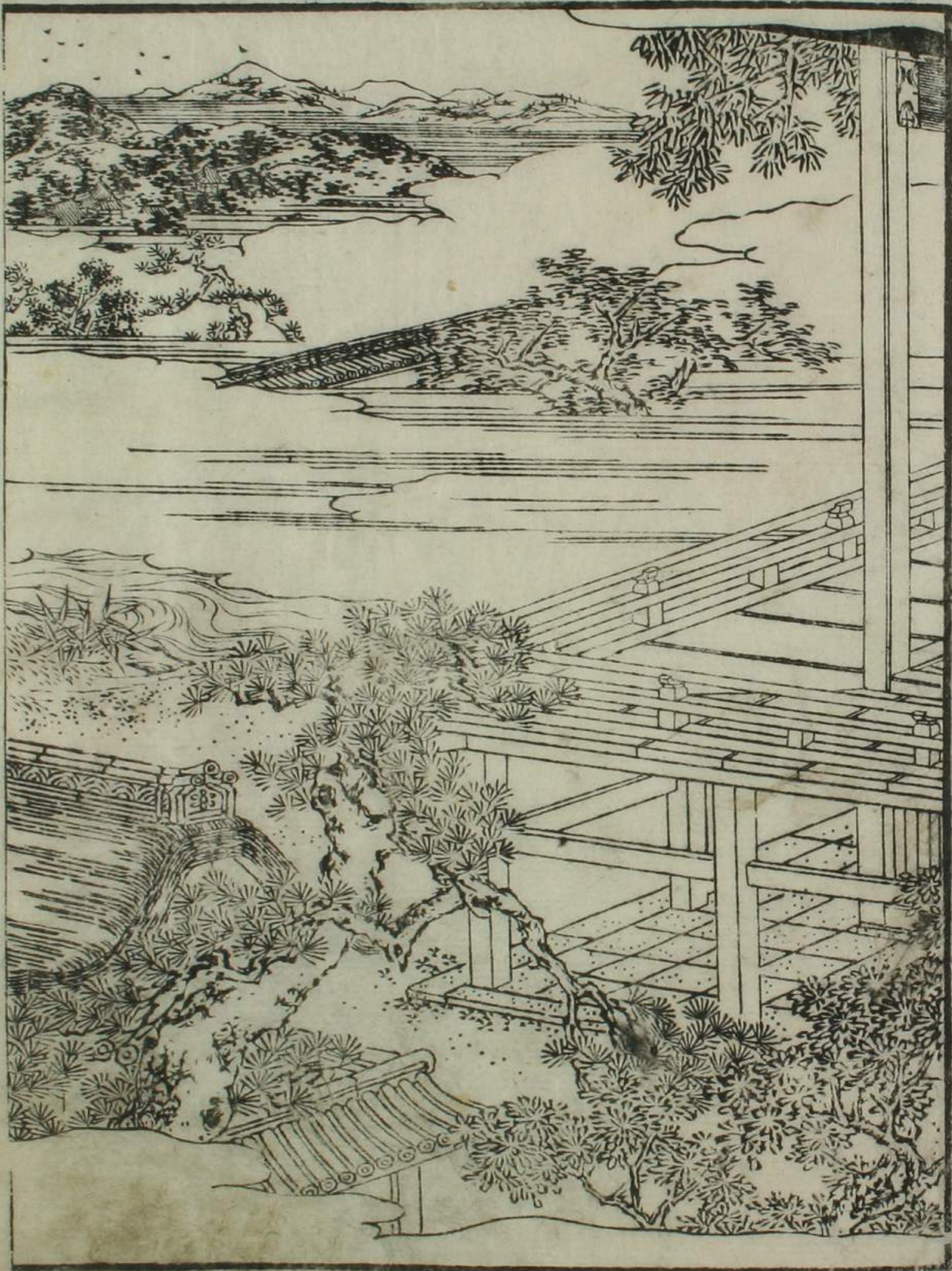
えり  
未だなる。之とは紫宸殿小出御なづく。玉社を席と薦めまし。明極と  
さじ平被をくく。香と拈じて万歳と歎す。時小勅聞して曰。棧山航海  
得く而本和尙行以度生せん。明極とて、以佛法緊要と書  
度生せし事て曰。正當法慶時也。不そて曰。天上有星。皆批小  
人間を水不飲東御は。従平て明極お揖して退出せし。お立日引  
敕使と對して、君尤難を悔あとつも。天日ニ及風雲を昇る  
御實をとて勅使と。佛門の慧禪御の跡を下し仰。時、明極  
とて。被羅御のおいやくは年をまだ。沙發たゞの御位とすを  
きく半絆ひき原田をうづく。其御の御事の志がくとす。き  
ちとまく作れとく。武昌もしそと多めに及ぶと。その經  
傳て淳安國へ延喜の城を擰て。一宮中勢御親王と大佐國へ流る

妙院院一品親王と瀬波國へ流し。弟に宮と恒馬國へ流し。母と  
さるあり。弟が家もあれば幼稚ふく徳ばと中御門守納言宣明卿ふ  
頼ケ。都のうち小室めすき旨。陰念すれ汝活レヤされ。はるを年  
ハ歲ふなを経ひうる。為事の人ふるもゆんざるもくへり。内だけ  
生ち。父帝の事うれいをゆう。伊波玉とすんへ延まきうつ車一  
極りやうよち。我を人船の内ふ止すとわせん。夜我を父君の連を  
きのあす。居しを。せんくらかはなづか御茶の役も盡りん  
かと。きは流おとやまとひく。御洞くふせたうき。ねも天の御子と  
御座う。白川うち都邊さとくと安か。宣明がたと我と異是して御所へ  
へもくをと作と多が。宣明卿も御子を幽處し。皇后にとて御所へ  
あら。折伏はてあとせし年。御あとくひう。白川の事ひの如う  
教万里の路を經てり。所とては。されば御園は附が

おとじあとども小却と秋風とふくあく。川の美  
かく遠作とて。の遠とて人とゑく。美あとふらむあと  
くまとやうとくと。官井酒とあくとせし。良々と作かく  
本もかく。市心のうちふきよ。梅も。宣明翁と異是してあくと  
おとじ。かねれや。あたう。被聞が遠く。白川の陸奥の名ふそ  
活陽渭水の白川。あが。迎えま守園。夏うこまと奉手と経て  
とす。

東海の軍主とひろく白川も日下す。経ゆとぢ松山を  
まと。新勝寺のあられ。とく。松山と極り。と極。と極。と極  
がまく。とく。名勝のまをと。かと。白川の花乃下

まと。皆名も。とく。所ち。詔を。御すかとく。と。ゆく。とく。又  
帝の御殿。白川。活陽渭水の白川うとみ。うや今ひ。と



和の感歌  
小鏡  
八歳の皇子  
詠じて  
奇と  
よし

のあらわの  
うひ出でと。宣明卿と恨む  
もあらわとその後うへ経て立  
まくは作らざりど。あらわのまつゆを中川  
達秀がすくねるが

まくらのひもと入相のひととすまし、毛をあらう  
馬動千中。上を下へ放外。浦城のもくらふるは  
もこまとあく。あくの頃、京中の俗男女。この奇と  
おはす。毛トモ八家の宮乃浦城とも教わる人ばかり

中宮紗夜行啓向河

先帝遠遷幸陰岐國

先帝迎と日又陰岐國へ迂りてせ続よまんと、中ま夜よ経まく  
白川の御宿へ泊落なまをひ。夜とも小御名あと情までまみと  
ひゆまと都く浦」盡りしは緑油の浦」於源まかのれのれまと歎  
きをす。すまひ又き上の道とまを外ちけの月と浦かまく半」と

相應ふ。ひひう思ひのうきをとからうも。越方の山ねぐらもとも枝  
の後乃千夜と一あゆ早よ。れ紅のまくら。めぬ。まよ。波ちやヒ春の後  
乃明かとふ心の申乃早。ひ。まよ。まよ。乃。まよ。す。中くみ。謂出させ  
之原。一節もた。唯。御。同。ひ。か。れ。こ。ま。せ。給。し。て。強。取。り。る。表  
明。も。は。ま。小。城。多。う。中。又。止。車。う。車。と。離。て。是。か。よ。

ものとて乃思ひへあらず。まことに命よりれどつこと居る  
ときありまじゆ院までまひか。御車の引附ふ處をあわせもあら  
づく。おみた車とぬきまかひのうちとぞやう。明とがえ弘  
二年三月七日已未都と出奉り。主上も御冠御坐御白綾の御衣  
一々御とお見。御代の御車ませり。竹林院中納言公室御。唐本  
寄小馬車をうへき上御用の中ふ。去年のとて北山とてその令をと

候。之の御と仰ふ侍従の遊び。終昇の事より。一早朝。今日  
を留のす。かどる物をもひ

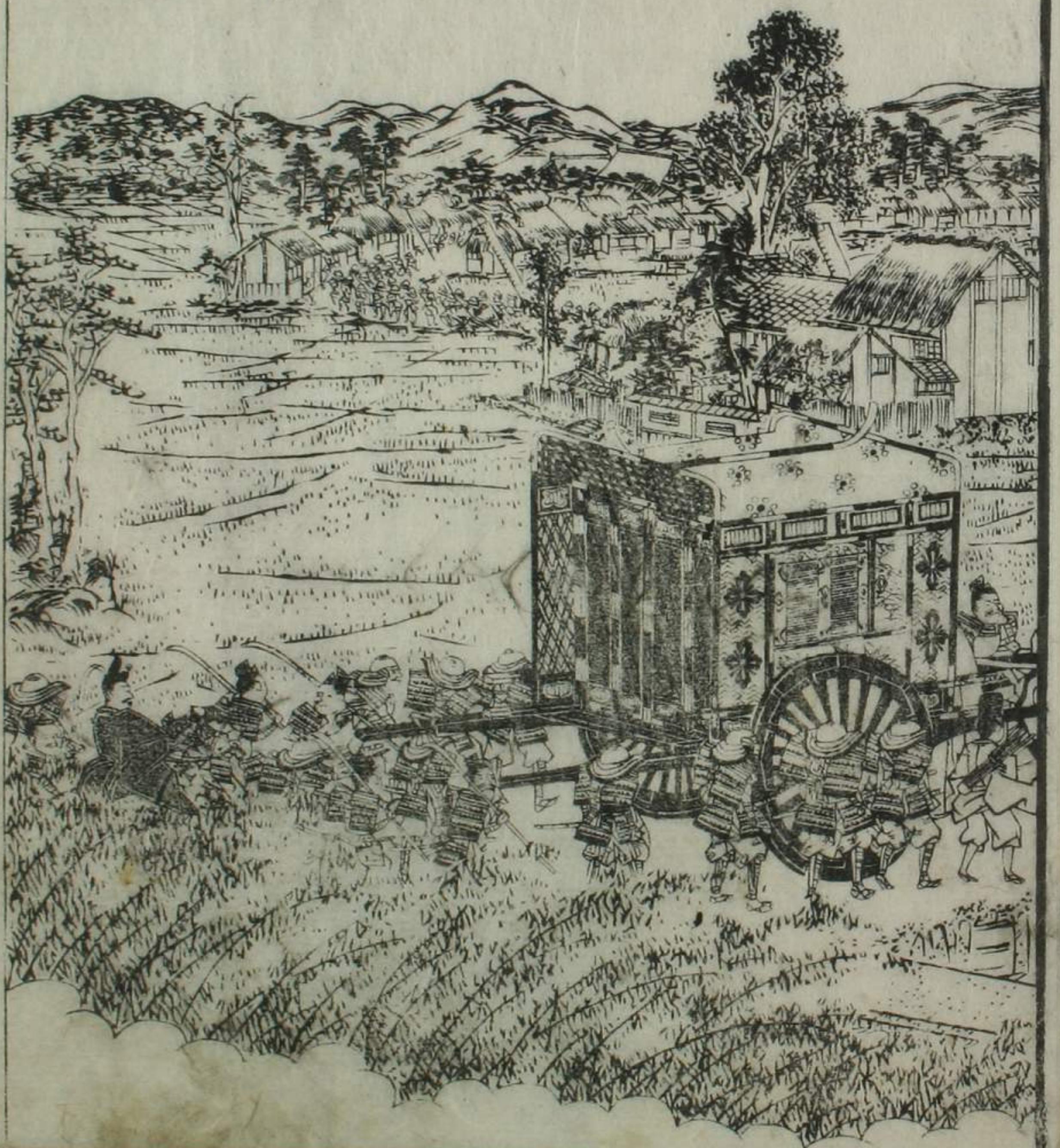
はあく。院もう金ももいあがよまき事と云ひました

ま。す。御き方のゆきも。らしげ扁ともの志のまとせし  
か。四ひまけせうひ。持くまな。中車も。さき。御傳。頭を  
夫の房羽は。少将忠部羽田。御公清。三位敵のあめなり。小室相馬。一統大納言典侍  
都の御名跡へ重ぶつひや。か。御翠園の兵士ハ千葉外賣亂。佐木佐藤  
入乃道參。小山五郎左衛門尉秀教。多良。後羅御織御所。はあく。おと  
多。秀刀馬被。まと。四羅。ぐり。今日と時とぞ。極ひ。京中の男女  
あやの紳士と。御くふ。うちかび。今の中野とよ。あるの母と義父  
と。ほせび。まと。す。おねまと。御。翠園の兵士も。者も。お達の仲  
を。や。向川。まよ。六時。度。七來。あく。車前院を。あく。御本と  
今。の。事と。思ふ。ゆま。入乃道參と。ちく。を

あく。まよ。と。あ。ば。其。も。は。の。わ。の。あ。ま。と。せ。と  
と。御。ま。と。と。道參。頭と。だ。小。付。特。御前。御脚。御腰。御手。御足。御  
接。井。の。筋。う。達。不。雄。山。と。伏。輝。と。い。二。日。清。陽。是。草。の。事。と。行。を。す。  
抑。不。清。水。八。情。大。井。と。事。う。應。神。天。皇。の。萬。途。そ。而。往。後。の。萬。聲。  
ひ。あ。と。か。ま。と。り。在。の。外。と。も。定。て。擁。護。の。因。脚。と。處。と。ま。ん。と。御。每  
く。恩。食。う。べ。と。ま。日。は。日。陽。射。の。筋。一。夜。と。ゆ。セ。う。す。サ。戸。の。か。イ。青。  
の。あ。と。げ。と。れ。も。ゆ。う。か。左。裏。て。共。不。似。く。日。の。づ。の。筋。と。う。と。と。

あ。く。ま。と。と。あ。ば。其。も。は。の。わ。の。あ。ま。と。せ。と  
と。御。ま。と。と。道參。頭と。だ。小。付。特。御前。御脚。御腰。御手。御足。御  
接。井。の。筋。う。達。不。雄。山。と。伏。輝。と。い。二。日。清。陽。是。草。の。事。と。行。を。す。  
抑。不。清。水。八。情。大。井。と。事。う。應。神。天。皇。の。萬。途。そ。而。往。後。の。萬。聲。  
ひ。あ。と。か。ま。と。り。在。の。外。と。も。定。て。擁。護。の。因。脚。と。處。と。ま。ん。と。御。每  
く。恩。食。う。べ。と。ま。日。は。日。陽。射。の。筋。一。夜。と。ゆ。セ。う。す。サ。戸。の。か。イ。青。  
の。あ。と。げ。と。れ。も。ゆ。う。か。左。裏。て。共。不。似。く。日。の。づ。の。筋。と。う。と。と。

先帝  
御遷幸の  
昌の  
隱岐國



御は小路後アリ

金あとちのやの水端の月も、河をとい、うんりす水の名。  
次日清川を過ぎて、湯本の田部と山麓をわづく。す旨年相手  
清川を海と業かずて、平妻の野とけ、里の代わ達へと花へ一門嘉  
と極めうる。義経ノ天の罰を慕う。海方をさし、う事とお像せうして  
まことの神と慰めまへ堪へたぬ。おあせとまく坐りて、頭の浦を下  
めりうらの音源氏の大船月夜小島と車く。せせかなたに、そせの林と送  
ふ波を唯れえとらむ化して、湖の底ともまづ小枕も深づく。まづ  
うと緑原の草とやうむ理をかうとぞ食すをうひ。明石の浦はいり  
ぬくとくねのりゆかるとあらがうひ

水の泡とがうて、浮きとわよるのうすまき、雪のつゝく  
雪中の馬水をみの浦にとか古津の馬すきて、あら作の國ある久遠の

ふかく、せう日

まちのくの佐和山あひのじまくふぢやひやせす  
小山多郎左衛門秀村のひふ喰ううかうの花と一枝をうて、六まかね  
ふまかねせうと山鏡あく

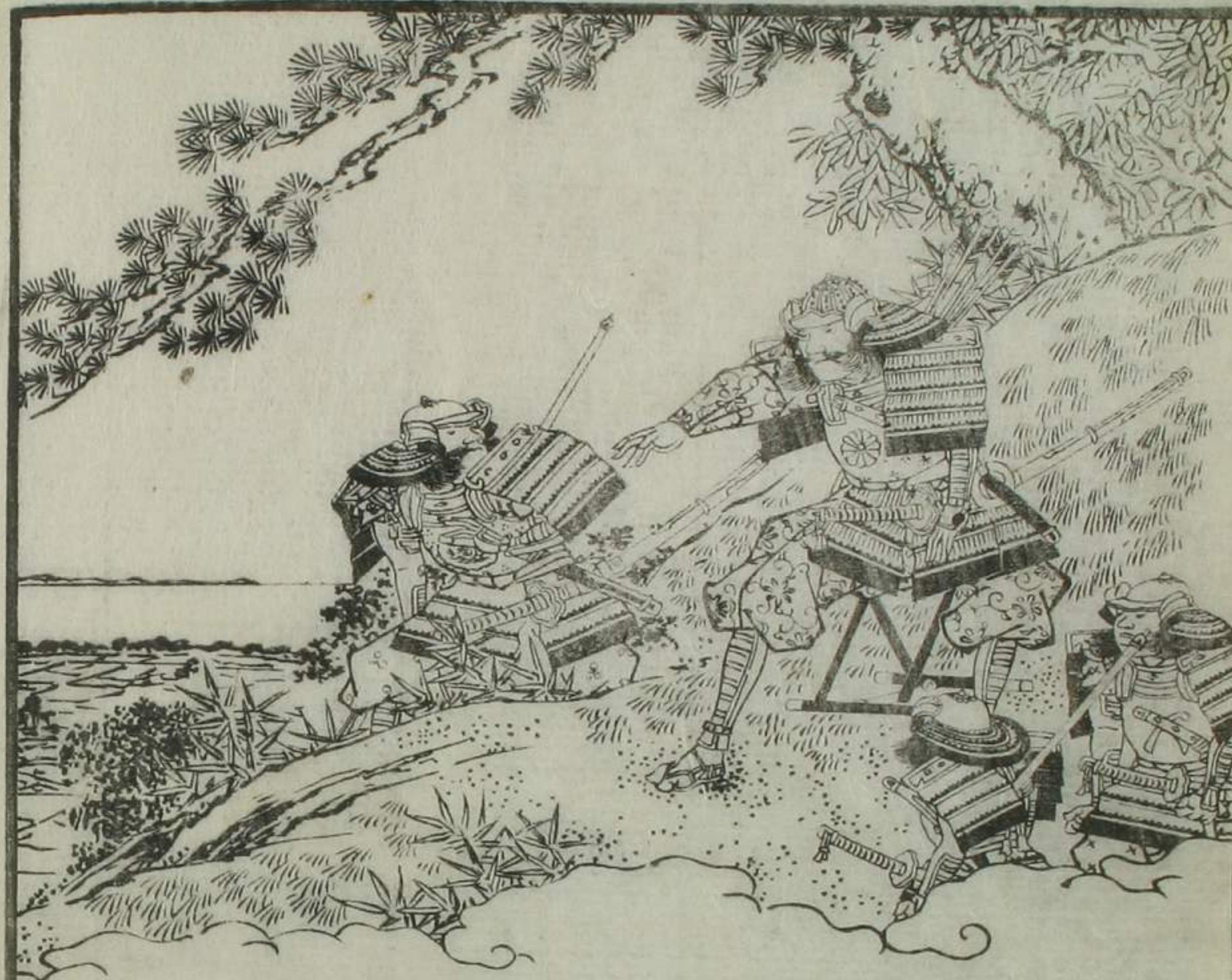
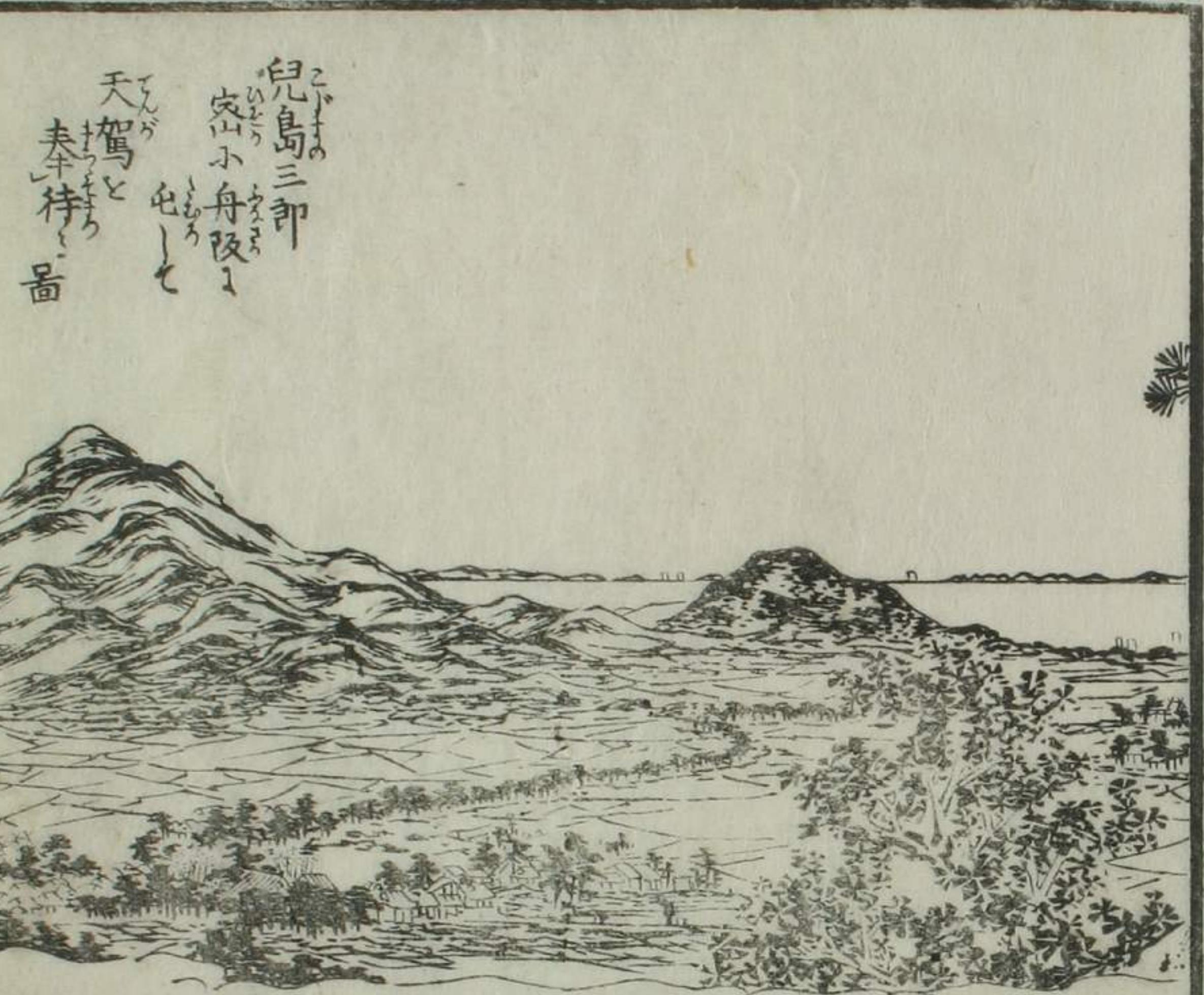
まちのくの佐和山あひのじまくふぢやひやせす  
今うべき呼なみふぢやのじまく、遙か岐き巣あう。山翠固  
の御士と多き山の名を聞ひうす。うまとその御者の大ゆゑとひどもそまう  
多き。おとせと山共と止むと月院源公の法施とまくせす。ねど根の木と  
分縁ゆの處と傳ひどく。うき山後とよどむせす。もう承えか後多月院の  
みとと延喜年のとき。枝折の通と今迷ひやと絶へとまく。一  
ゆのうくふぢやせす。御酒也とあうす  
うき山のねれせとまく。ひし人のがくナシ

うららん。と。と。そくまよひ。  
おとて鶴鳴ふ茅店の月と抹過へ。馬蹄ふ板橋の雪と踏破へ。竹崎  
めまもら。おとせぬひもう。十三日とす。かきはれの浦ふ著せまし  
そと。いと。まともう。じゆきうま  
支よりるる尾の添へ移りまし。渡瀬の吹風と待せまし。糸。卯月朔日  
えとおぬ。御舞園の風土もの。ふか夜更ふ待まし。おもむじく  
むづくらんをのやまと風ふ空令く。うるま年のはくわくようみ

くにひをじせんり  
えんぐとくわゆゑと  
口馬萬寧戊辰庄

高德肖櫻樹書節

おもへる。去年五月山下橋龜をまわひてとき  
朝す氣して鷹を馳めどよどひりまふ城をくわせ。とくに國  
とくにせざる。もとあらうが。歎息してまつ会の月日を送りける  
處。主上今隱岐國へ近幸のゆきは人をもひ。とゆく  
ミ密に勅命之時也。志士仁人を害せ。仁有教訓。義有  
とつて。音衛懿公北林のゆき小糸せざる。もとほん庸きとあるよ  
め。自殺と割く懿公の肝と己の泊中一小め。生氣と死後  
指し。失く。因義不為を勇。ひゞや近幸の詔書。承命の上  
の風聲を奪ひ奉り。伊海快復の経と奉り。そぞれを  
大功と一時をもて。焉計石舟へれて忠義の名と千載の傳  
をもと。日本の一旗をかくし。ふかく。おもへば  
もと。日本路の難所をあわて。もと便とくづく。



捕廣備船の候。舟坂の船を屯し。近幸の天加令を送り。まち  
タクセアル。奉書をお遣して近幸捕テの今扁。山陰石をか。せ  
クヒ。舟をもろひ。うきとぞ。うち。心懷ち。お詫び。せとも。寺進て。美作の  
松坂。うち。誠。伏代モ。まへ。まく。と。族。寺。三不ふと  
並。通ひ。あまき。吟虫と。傳。い。向。と。敵。す。りん。揭。経。強  
名。ひ。と。き。うち。甲板。ぬ。と。城。そ。い。ふ院。の。底。ア。セ。く。ま  
す。く。ま。と。主。徳。の。族。た。わ。と。ま。ひ。皆。あ。く。と。な。う。ふ。る。主。徳。と。今  
ハ。終。手。た。く。せ。く。我。赤。心。の。板。と。と。算。と。達。ち。と。おり。微。服。階。行  
と。行。在。の。邊。を。経。ひ。と。も。と。お。便。と。ね。う。う。う。或。夜。月。の。時。  
ち。ふ。と。幸。お。行。在。所。と。想。い。入。て。と。き。ら。と。と。櫻。の。ま。れ。ま。  
喰。鶴。う。一。樹。あ。主。徳。と。樹。と。削。さ。あ。び。く。又。言。一。聯。の。向。と。書  
し。名。と。書。ま。

天莫室向残 時代と花盡

明頃。ひ。守。清。持。毒。の。聲。こ。と。え。と。ど。も。の。半。と。ゆ。か。る。者。う。き  
と。ゆ。か。ん。と。解。ま。う。と。嘗。す。と。風。絲。が。千。と。ど。も。ま。ま。と。更。よ。是。と  
も。う。追。ふ。天。空。と。達。し。う。ふ。と。上。へ。忙。く。と。ま。糸。と。得。ま。し。紡。糸  
は。ふ。紡。糸。と。美。せ。ま。と。ど。と。武。士。の。聲。の。を。參。唐。と。あ。ざ。れ。ど。と。ひ。聲。し  
う。半。も。な。う。う。押。あ。の。侍。の。む。ち。者。吳。越。と。吳。越。の。あ。國。霸。業。と。華  
と。華。軍。軍。の。妻。乃。李。ふ。齒。と。吳。王。周。朝。誠。と。傳。之。越。と。吳。越。の。易。示  
金。虛。と。假。い。多。と。記。と。と。七。と。十。三。國。と。平。否。せ。ん。と。能。す。と。呂。周  
庄。公。と。傳。の。と。云。今。紳。の。力。と。ぬ。と。是。と。七。と。十。三。國。と。難。と。云。の  
在。と。今。兩。國。の。力。數。と。傳。と。是。六。卦。十。萬。射。八。十。萬。う。少。と。少。と。大。不  
敵。す。と。是。と。一。か。り。味。と。以。く。計。ふ。事。夏。日。陽。う。志。

賞とれど。松重の陰うり刑罰ともふたび。時今春の邊  
征伐のときふらうす。是をへがきのまことなり。是人處すとまうち  
至國後し。是きく皇宗派子爵とも者あり。雷にて且音  
渠英國をあんねん亡す事難しことをこたり。敵解の角  
肉あつて極きとれず。勝敗は二をト擧て一陽本腹の大と特  
君主と并せ中國ふ勝てあ面して號称せんと。然く伏兵傍詫  
待時もすゞとやまきど。勾践もと自と虜ひと越の十一年二  
月もと起して吳主夫差と夫株縣を死。仮若昏うけふらうと越の  
去ちて往き勾践もと夫株縣を死。夫株縣を死。仮若昏うけふらうと越の  
とお圓く堅と半強弱の如く。勾践進退もぐる。其の大軍山の足筋  
せんと欲す。毛呂文種をもと連れ家ふ善の左軍橋船と納船とがこそ  
降を乞し。而敵もと之く是も夫差を因へ。倭舟とうとうてあく  
ま

勾践の降を却す。伍子胥争ひ練めくもまと止むとつても是も用  
ひす。伯嚭がをもとをして勾践と仰る。余齊の圓もと多き。勾践と  
伴ひて吳國ふゆる。勾践是の軍馬とりく夫差も仕方無一年。  
自分とも軍船をうり。是軍船こまとあす。魚の船ふ一舟の書ると  
收めくもとを。勾践魚とれくもまとアラフモ候く白

西伯因姜里。重耳支羅國。皆以爲三霸。莫必子許歎  
とぞ書くうる。あると國く勾践をもとて御坐す。あるとき  
是も支那不敵とアラムと更く医僚病とあは。伯嚭もう名医本  
つて云病猛重とつても。そのは敵と醫病とす。是の事ひと滅も是と如  
く有り人あらば。班く治すべしとたかことと實もあす。勾践がりく  
我も其の御の事想付す。べき約す。射くももと實もつて。我  
思ふ軒そんと。もと敵と實くも健て医術ももと實も能て医術

瘡用とかつて。是きの病頃をも。是き丈羌ちよもひ人有ん  
か我死我のそ樹之心哉と。射ニ勾踐と敵と國帰  
しりんとす。伍子胥又アマム云天と云れ却而受至多。けづ城  
の代と云すを勾踐と云ふ。年。ヤシモ  
獨あらずをもわん。及や勾踐の父君閔國をの傳  
撃を共ふ可戴天。すもやふまとと練。後の想と除じと追  
ひ。夫差もまとと強す。遂不勾踐と戰の際へ歸す。勾踐聞之ゆを是  
貞と稱す其心と絆ひ。范蠡又アマム計を西施とて容を絶世の美  
人を是す。是もあまと是す。而能とえく。けあ能ハモ須  
天下第一の美婦として精ひ成く。アシ美。百の媚人の眼と述り  
て御く池とふ花なとと經ひ。能月と、僅ふアマム。千懲人の心と  
薦してからき御月と生ひよとおじ。もとて度え中入をよう。是す

夫堯姫東小航て政を擔ひ。民の愁を思ひ。國の危も察す。姑蘿妻  
を遣す。今敵抑云。四邊三百里。う山山のうちふと渡し。被ま路不  
あき。春日は靡脇と櫻く。蘿と蕙く。乃ちよ。宵夏の夜は寧久を  
集め物小易れ。ゆ月全彼尔。淳木林の夜は内底も宴樂とて處の夜。う  
とえれ。千山白毫の毛れ。西絶と赤小流の裏と。あらそと  
ず夜も。う堂も。雨も。止障也。ぬる足音を。ゆと。ゆ  
み拂ひ。いの。是と敢く用ひ。威と。き又。是と。あ能く。是と。ゆ  
け。群臣と。りす。何と。足りと。滿臣と。其と。玉と。浦金と。襷め。うる。富陽と  
登り。ふと。従と。多く。かげ。情。紫水と。きのみ。是と。夫と。是と。ゆ  
ゆる。脣と。口。この始。蘿。岩。數十里。射の。う。ふ。ら。び。草涼く。う。の。巣  
地と。なん。奉。を。ま。ふ。わ。づ。か。う。を。う。の。林。と。あ。く。お。と。わ。づ。り  
て。徳と。ゆ。の。こと。夫堯。慈。航と。て。役。ひ。す。又。あ。と。き。ゆ。る。足。あ。れ。の



剣と夫差のあら抜て抜きそつ。ほは剣と廣と退邪井掛めう  
とめや。今國の似んとする半身を西施あり。わが國西施の首と  
ほて社稷のあらそとおがべとそテと嘆く。夫差見て殺す  
倭は仰詰夫差を河づく。あまう小倭の脅を絶す。夫差さまを信じ  
て僕の足脅小死を猶。伍子胥天と仰て歎して云。練君死節ハ已  
臣下の仰う。今天已不棄矣我乃く三年とも年して誠の兵多す  
さん我衣服と穿つて東門小掛垂べ一雙の眼赤枯筋小誠の  
暑と手と汗ととよふ剣と体へだす。夫差け絶と嘆をちる  
僕の足脅頭とはの仰ふつて。是と東海を棄す。江东の民その  
大義と名を痛と述。是と日本時のかれとぞすくや。僕の脅  
のじのじ三年。果して誠と名方將の名と卒とあるとぞ。時と  
伍子胥が是と号をとす。誠の兵と接り

小御さん。越の馬はあま不馬を。踏とろく馬の馬を攻入。奇楚番  
越のあと合せく里つて夫夷と神の車板。因夫夷もんふ用ひ而て  
弓不六十石筋と達へ始発耳金不お上り。城もか使者とそくつへ  
天ひく令鷹か若く。時局夫夷こまと仰けり。射るをさう  
城の下居とからく。馬の五社とつまうじ。天皇と多摩の祭とらねず  
ば。物が今日の死と相ぶべと言と申。被と着て降とし。神  
モウ絆をまとめて新と申す。改ふ助ととくわゆち。御神事  
と義やと勿城のあふ進んで云代柄を観不走。うち御つづつ  
天誠と義と。而夕と是れおとく勿人う日の難ふあつ。今印  
天吳と射くわよ。是とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
天誠と義と。而夕と是れおとく勿人う日の難ふあつ。今印  
達べ。内御行と。是とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
廢とんや天行水寺不門の店とて。あんのうちがく  
廢とんや天行水寺不門の店とて。あんのうちがく



進ひ。夫主事の契りと又く欲てそく。やまふく伍ふ足智、ケルと  
齋すと西下る。わらの面目あつゝ見る所の下、おでて何を可  
うむじと頭とてのゆき雪ひ甚ようとねじてゐる。おは  
後石城鞆とほく軍とねり御船と練と練と練と  
遠く金弓の船とぞとへやうぬ城闇と解て遙と西施と  
と産経う津めと用ひす。是と船駕て曰。是と共に  
君とあらず。切外而遙と退ハ天のさう。傍西施とけ候よ無  
純道小ちひく我功業もまくかくへと。或夜西施と勝敗と  
小舟とまくみ明小掉とて西施と小底と達め。舟の國小をと通  
て姓名と陶朱公とあらむ。す。陸扁舟とて行つる。主徳との故軍  
とそひ準とて。一隊のわ小手のせひと述。船と御室と達し。今  
呼忠を主徳と徳。當時羅侯の權勢小をと義旗と徳と帝

命ふ立た者一人もあらず。お志の志とあらず。銀雖と暗  
祖希と立と帝号と極ひまさんと欲と半不和とつまむ  
忠天と通すと渭う爲す。また又名帝の美尾の清と十余日と遅  
るあつて。北風と吹き。船人獲とめく御船と。おは秋百艘と  
後大志小漕と。又。万里の東と。おは。時と。徐海院と。月と。西北浪  
と。山船と。と。月と。東南天。漁船のゆき行ふと。一船御岸  
出す。掌と。また。草岸の種と。紫船。明と。また。ねの風と。揚帆  
カド。浪波と。日暮と。まのねども。都と。出づひと。後。廿六日と。やと。御船原  
故國と。と。前と。信と。東方。後。被。判官。清と。府の腰と。と。又。又。軍の  
御船と。御船と。白主店と。お屋と。起と。人と。お。頭。大支。御  
房と。六際少ぬ。お底と。房と。二。往。敵の。お。ご。う。う。昔の。全。敵。お。樓。と  
終。と。また。御船と。行の。縁。殿。障と。おの。牆。一。夜と。御船と。高

居と御代をす。鶴人燒を召す。豈國の武士の養はせ  
考がり御代の事不透とも。や極めて入セうひてを。高木もあまを  
考え。其戸の御事と御政もなきとも。至るのをあらむ  
入さきもすれども嘆ての心勤北辰の御邊事も多うります。そ幸  
りうる事なきよ。而官事事務は波清配御月一人易往宿膳  
代御風とす。天能事事務より正身引く不取締と申す。されど  
掛天日月と為縁明うなる事と知るがときとまづ竹本も妙之花  
年もとある。あらむ

藤房季房謫常刀  
貞婦悲別沒大井河

萬里小路大細言。宿房彌<sup>ハ</sup>。す自古房事房二人の取扱<sup>フ</sup>。

卷之三

おまかせとあつた。まことに、  
まことに、おまかせとあつた。  
まことに、おまかせとあつた。

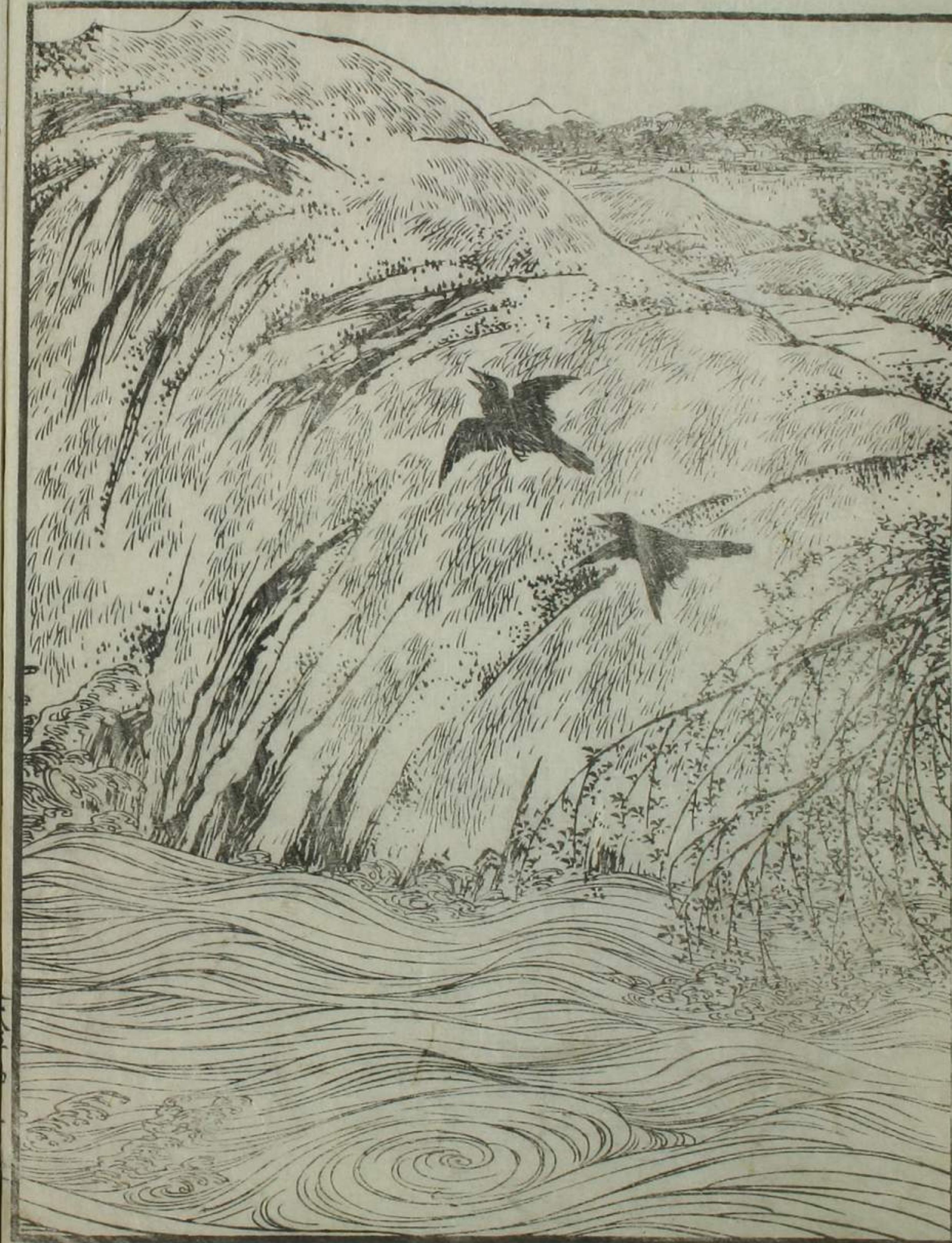
ちつともひらひんを身のまゝ

せうとひきしもゆのひまとこすく命なづく  
取ふれ林あまもうさくも。先れ彌鷗の月御空威と傳  
らきて柏原の海と草む。又に笠翁と祥もそを陽の慈と懷もある  
運の通塞。時の否泰莫とやせん。ゆく後半もて哀樂互に  
推移す。まともかひの在れ中よ案ひよ。跡すよとゆくり。  
より往不中納え友房卿と常陸國へ流れて。小国氏絶大財を  
索て大進事房卿とは國へ流れて。ちほ縫ひよ。たは  
を流のうがまく。ゆきあくまく。泊ふる處の心中難をも  
なあまとかう。近身中まの内あるた爲の爲として立毛を拂まろ

女房のむらさき。すうえひえ年のねのじと。おれゆかてり草  
なづく。御が人の糸のむろとき。ややのまつめ神と廟し。梨園の舟あせ  
とまく。御後急音のむら全まのぬけ船く。け女房深色の後  
あひく。青海波と岸ぐれく。圓鏡うらゆちのゆうねりふ滑り  
あひく。青海波と岸ぐれく。圓鏡うらゆちのゆうねりふ滑り  
う。出羽せらる象の巻きを水の底あ難う。遠見も粗筋ともうそ  
う。出羽せらる象の巻きを水の底あ難う。遠見も粗筋ともうそ  
ふ魚躍をうなり。中納之ほのふきとすみくよ。人をすぢい和うそ  
んのき。日あ列く。深くめのせ。つまつまと傳ひうりき。山  
鶴く。歌くあく。せひくとててもとひうとてくと。あくと  
ゆうる人の絆く。あるいじと詰とまく。一夜夢てとよどり  
たぬれとく。うくとく。もはの夜せ半ぐ。老僧小舟かへる  
きをうくとく。中納之も衣冠を脱ぎ身をもとす。中納之  
もとす。中納之も衣冠を脱ぎ身をもとす。中納之も衣冠を脱ぎ身をもとす。

け女房すまやとす達び。木の葉うもじ。うろくおもがく。又  
おのねうとすとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
わきを船中まのむらあと北山越へまくとまくとまくとまくと  
もとす。中納之も衣冠を脱ぎ身をもとす。中納之も衣冠を脱ぎ身をもとす。  
中納之も衣冠を脱ぎ身をもとす。

黒松のむらじとぞなうへ量を今ひの船とどもと  
まの女房次の船うちほく。般の船と船とくとく。後でかき  
ほくとく。かくとく。かくとく。かくとく。かくとく。かくとく  
船の文字とく。船とく。いとおひよかとくとくとくとくとくとく  
人の車はくふかく。虎伏せと縫事浦をうる。うるとくり。とくとく  
とくとく。とくとく。とくとく。とくとく。とくとく。とくとく



あ  
る  
よ  
う  
に  
あ  
る  
よ

卷之三

と先の物語は、おまかせしておきたい。おまかせしておきたい。

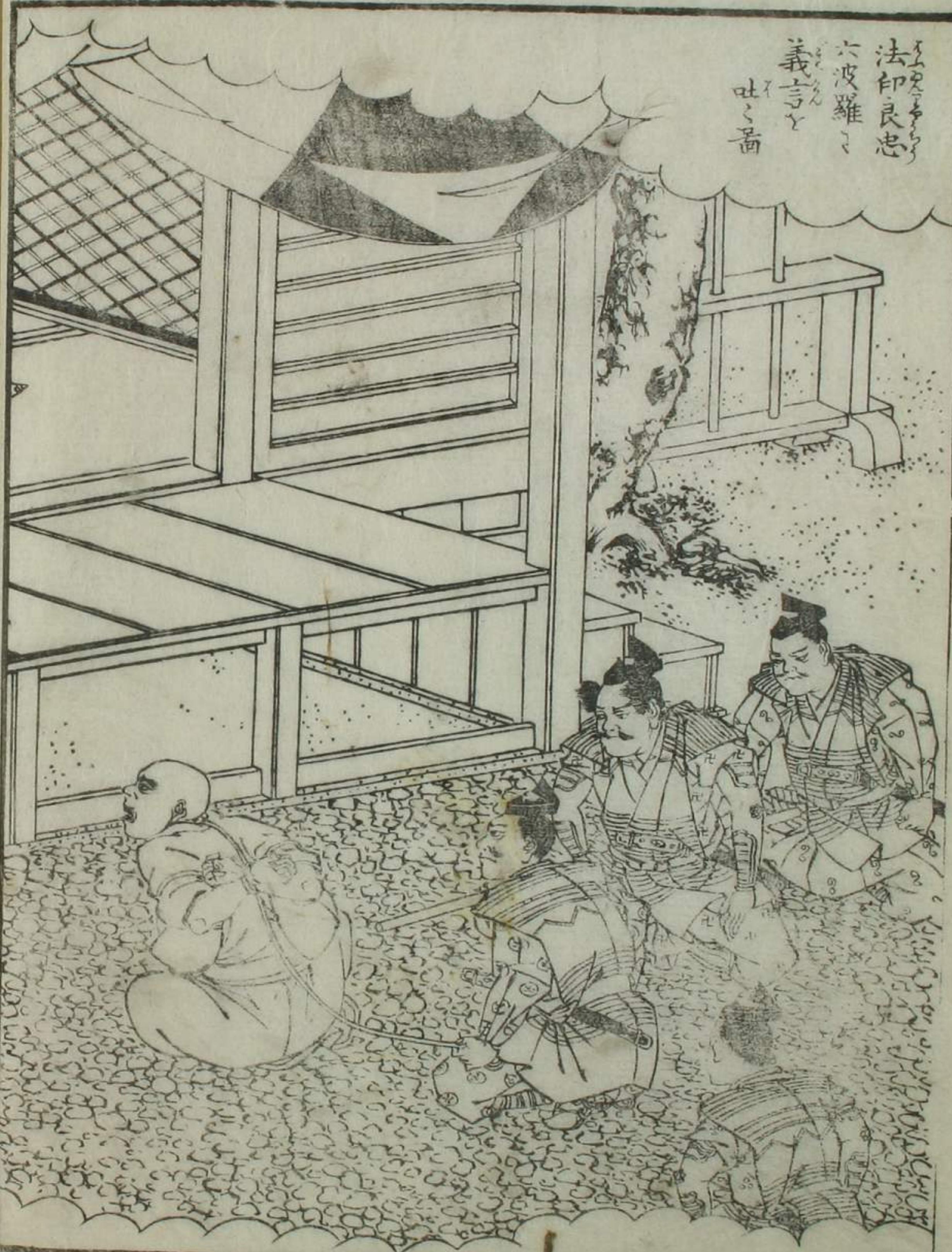
大井川の宿を出ふをとせぬまつとおもひ。鳥居一回恩詔妻  
ひのこあがまう  
西身もとく放車も。約も繋りとつむげーとせんはまとく

良忠六波羅吐義言

良忠佯狂遁堅牢

ヤトリて諸國の大名を徴りんが易かず。是年八月、室町の株と物と原  
うち行きて。九月廿日を至る。既不居城。ソシテ往く。民も往く。不  
好處在候。特急流汗。とめぐらしき。うかひ。即とく者。所人。因て  
大歎声門は少時のみ。小車。亦即。帝。御内侍。信。不捕。捕らざり。小車。秀。信  
幻。六法。種。の。北。引。廢。ノ。まき。れ。御。室。仲。時。廢。あつ。引。出。せ。御。故  
ナ即。五。清。と。り。く。や。く。れ。う。ひ。頃。一。天。の。君。く。む。お。ち。き。ひ。り。ぬ。御。流。役  
を。ゆ。く。内。か。ん。ど。は。御。の。し。朝。そ。思。ひ。も。す。く。半。え。も。よ。事。う。と。ヒ。持。之。ゆ。く  
あ。そ。ま。ま。り。へ。そ。ま。の。く。な。ま。先。帝。と。眷。い。進。す。せ。ん。夷。隔。よ。南。朝。の。重  
男。女。と。ま。と。お。ゆ。く。と。い。う。東。御。御。御。の。く。ま。科。被。く。く。便。深。の。入。と。て  
御。貢。キ。あ。う。ア。使。差。の。連。若。え。計。の。脇。て。わ。状。難。く。ア。風。ア。風。  
金。く。は。進。す。べ。と。あ。う。き。と。ハ。下。良。也。宝。も。あ。モ。石。丈。高。た。う。と。委。モ  
ヤ。さ。い。う。ね。と。普。矢。下。と。北。と。地。幸。ち。く。え。と。相。モ。兵。先。帝。の

寝襟詠うが。ナミミンヤ。徳余の異を述へ。舞う。起みんや。歌あ  
ふ。竹と。あ。辞と。舞し。しまんと。練。事。たつ。止半。たつ。よ。と。き。と。練  
せん。う。あ。と。優。達と。全。柔。重。不。楚。忽の。優。あ。と。始。う。豪。絶の。あり。ひ。き  
と。純。な。え。く。ま。を。の。宿。居。へ。集。内。で。る。ゆ。か。志。う。ふ。諸。圓。の。義。掌  
す。ま。と。剣。有。せ。ふ。う。う。あ。源。中。幼。奥。行。卿。と。密。候。し。倫。有。と。下。ト。と。  
て。あ。う。と。て。あ。う。と。て。あ。う。と。て。あ。う。と。て。あ。う。と。て。あ。う。と。て。あ。う。と。て。  
門。の。大。扇。と。か。い。ひ。え。西。の。後。改。と。う。ま。人。あ。と。白。代。と。出  
京。さ。り。衆。を。綸。す。紗。射。と。出。海。そ。博。教。國。さ。る。紙。小。の。る。  
力。な。く。キ。と。ち。し。り。剣。と。先。帝。因。と。お。で。よ。が。か。ふ。白。舞。た。ま。り。ま  
ら。ん。が。も。う。と。山。つ。の。横。川。ふ。居。と。薄。不。相。と。ふ。休。ふ。多。え。商。被。一。寒。い  
入。れ。ま。お。の。あ。う。と。と。迎。う。絃。多。う。と。お。ま。め。う。舞。終。う。と。半  
い。ま。と。感。う。こ。と。あ。不。え。年。年。み。舞。節。う。通。年。よ。う。と。舞。國。こ。な。う。あ。う。と。と。白。狀  
の。す。と。と。ち。ま。一。人。も。と。有。行。の。半。は。舞。う。と。即。あ。と。と。と。と。



多々。是を足助の折り今皆乞ひとぞ多く従食へるよしとれ。  
幸ひかうる返答しては車を近人へ。まことに折りの月も熟命の  
地と云ふまんさんと氣合と生じ。板一とお波羅と松へ良患と生  
れせらうる。法師えうり思魚湯と云ふ。従者のみ名と久世  
み波羅と云ふ。坐し十市引田をまでて乃がまうる。はや望華  
の中を傍らす。當時音首と切らすと幸ひき。行もく  
せわと迦葉と云ふ。其の内鳥と忠勤とおもて。謀計とめぐす  
アと巧く。先始めに波羅と云ふ。病とてお外れく令せす。ものら  
俄かねどりき半のまと云う。と云ふ。確かくて前の和と限らず  
元と出でて船歌と云ふと大あそぼう。令車一又常のとくう  
角して十日をうるを遣り勢い虚う。おもて波羅とゆく。右の根。左  
とくすて重ふと云ふ。左がう。扇と垂れと垂れと扇と後。是を要す

又体痺麻がむ。令車とよしとれと乞半を。うち算六喰。車  
常と倍す。始のたゞ北嶺と云ふ。行のとくとく車  
三十日をすとぞ。入の車の而へどせす。わふとせぬなとすも  
あ。又は行のとくとぞ。御とさう。御と嘆。御と作りとすとく  
天の身とぞとぞ。改小強食と使ひ。は仰と國主とよし  
きよかう。あうまでも。生れう。病とぞう。と半車も知らう  
船の船ふあそとて。室東下の車あづく延引とぞ。ねうとれ。  
は仰と仕事とぞ。もととあらう。或夜あ風とぞ。暴く。目ざすとあらう。書  
く。一舟の力と云ふ。堅牢と牢破つ。船の船とぞ。ねうと  
く。唐支と。林立の木またさぎ。車とぞ。うか。越後も仲間と  
うか。舟の者とぞ。船とぞ。ねうとぞ。賀前とぞ。船とぞ。ねうと

忠の支えよりれぬ十市へ近づく。左郎左政が許せぬ事い。後の大坂え  
の御子小尾く。令旨と賜るて赤坂四合と隣り合ふ。遂に六波  
羅と政敵を一車り。絆よ後の方と見えづべー

按すつる良友室と税出する年も多き。お仕方多持と節度うる  
あまなうけ者坐候の遠くからびゆう。廻もの夜まくらと島をとゆ  
けりか。れき多め年とせよまくら

告置囚人所流刑死刑

具行素死江戸柏原

三月七日先帝駕々都と出御あり。改故國へ遷るをうむ。是  
八日一宮中勢親王と侍本主丈判官時信と臨時の御船で回て  
土佐の郷へ廻ります。同日内は院二品親王と長井たぬき美濃守吉  
廣と御經國と。慶成國へ廻ります。一宮も今とひ細ひ熱烈の  
りと死く。壇門脛上の景宗埋り共。せあくおののくと充と角も

うるやと天と作ざばく做く御行会ありとまと。明日改り  
先帝都と出ませとまひうると廻る。御行会の少秀もな  
れと細く不食とすら。萬士もおれ多めと中門小御典と若  
とせ多す。擇へるをきく御間の中

せんともう擇ざなき御行つよふぐく海あうさん

妙は院宮もまみへ先帝のれがよ。うちてまと我がのよふなう  
のくまうとゆと縫ひうし。御經國の御子と御子とて是れ  
都と生まし。まもれの日とすと御とま。内中の申  
と御とま。御の申と御とま。十一日の申と  
御とま。一つえも妙は院宮も。聞く紅扇も看せよ。御とまと御と  
えとま。一つえも妙は院宮も。聞く紅扇も看せよ。御とまと御と  
うわづかうとゆとけよ。御の申とま。妙は院宮も

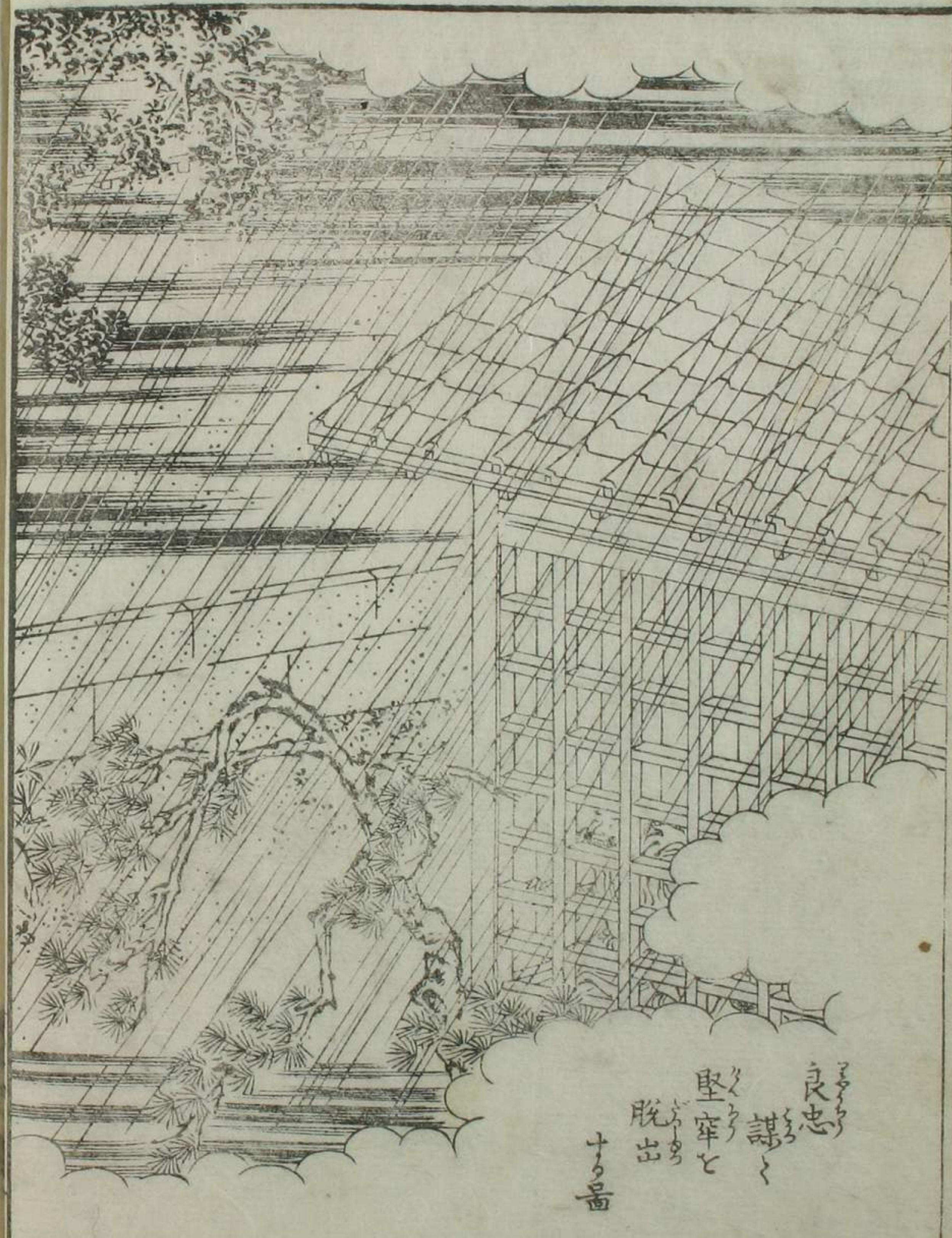
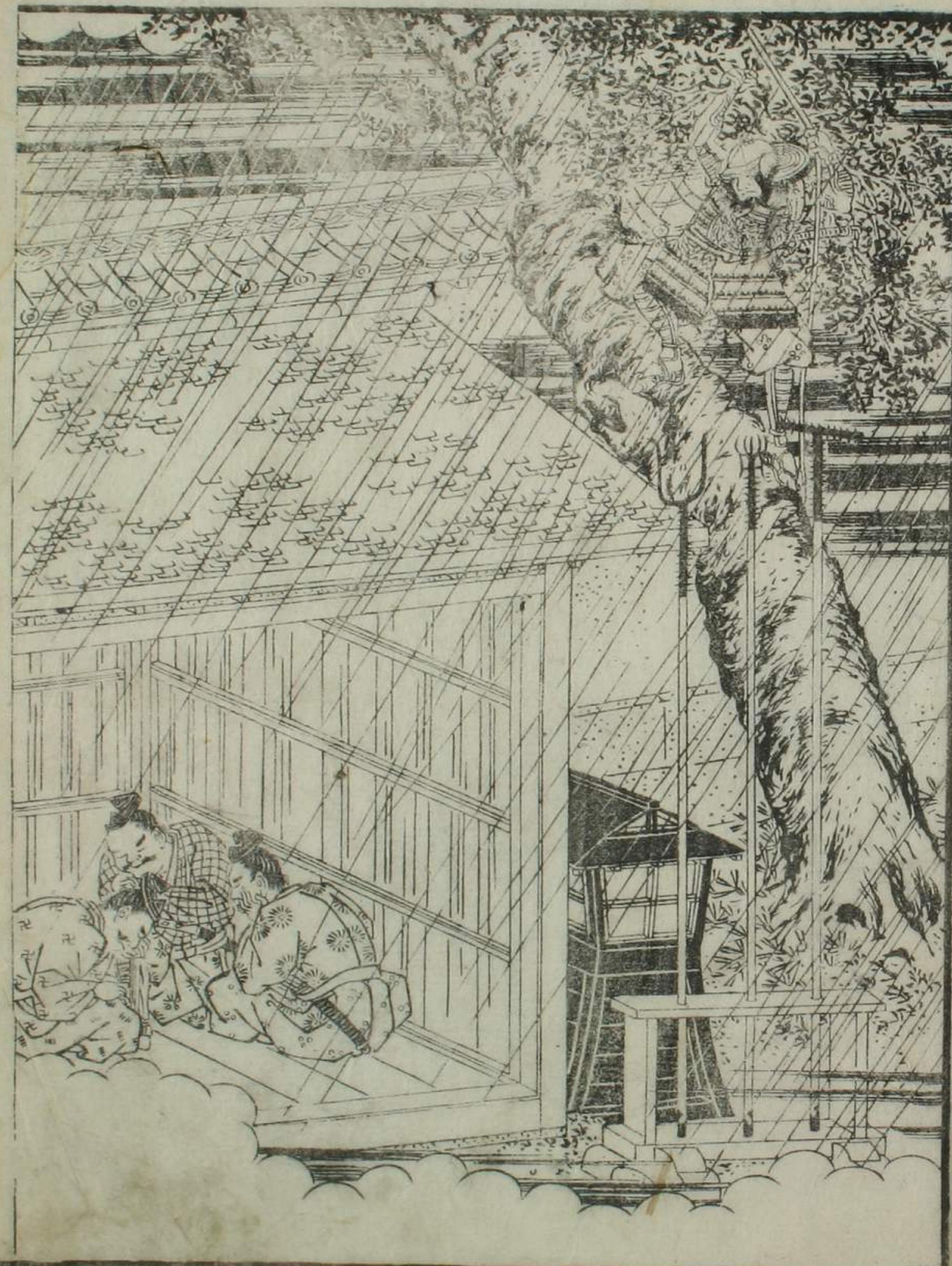
内々と多くてすひくふ

今まども日ひあらと年またあくまき彼とまゆる

一のまゆ返事

うすうへゆきはす事でも通じんよあぐもなと  
配おひきふ田國とまゆもど。であくへ日ひふそもあまと。奉安國の  
便とまゆとなむひ一節うさんと。念じを含みもすゑふも。一のまゆへ  
船を浮かせてもすへ候ふ。傍まで土佐の烟へ移せこすへを。  
有井三郎大馬助が彼のがらうふ一室と構へてまゆ候じとある。  
け阪南の山崎へ北ち海路へ。支那のりを航ふくと御神の  
洞と應の城へ浪内枕も事も。古の多岐遠う。前此の御神  
の御行の為す有也。また御内打手の縁縁もやそひえん。御  
御岸のまゆ。毎月二時の薦饗と千日があひ修しと

ぞ多くる。妙法院の宮も是より引別きて。侍あ國主を鹿児と經て。  
見事の吹上より舟舟うち。櫻坂の鐘岡小倉せうふ。見も海  
をさ跡うまする。宇喜勢御守を保し。樟海の御堂ましく漁奇。牧  
蟹のタチ。山野喜。海月の林乃色。耳う福生自小遼るもの。山洞  
ととあつ蝶うすとつ草た。毛か葉に四より他る國へ通じ  
まつこもまのち後を田利重。まつま。東南院修山寺等ハ下  
経。中華修山後難ハ財馬國とまく。俄小その残て改り多  
長門事へ流さきす。又接奈大納言公敏と上総國へ流し。平  
寧相成浦郷と所隠謀登頭の一人うまば河越參政。國主警  
固して後食へと寄く。被だまでも異へままで。お接の事に取て  
あらま。侍院中納言公明卿別當常安寺郷近人を教免の  
うすあらわ。孫心引りやからん。被多世と縁介。仕事



翠華の聲と剣素門のすゞめすひうる歌行とく元の乳  
の筋め。佩小袖と修まとは比と多寡。是御経部を  
詠む。身下り御便満玉巻く扇も多毫と多袖く端が  
多袖ふ。毛羽や強うりともひく事の東引手知く多袖と勿と  
多袖は晴。源中納言風引へるを山原縫張率の一人  
うむ。彷彿仕波剣官入石通參言陪次と多學固仕く後金く  
アキラム多モ多モ多モ多モ多モ多モ多モ多モ多モ  
國と誠すとて

す。探使夢ひてくらべてさまえ佑あらそて申仰  
おもへまへまへ。むろる先帝の御事や多くの人死申ふ入る  
まゐせき。今更か極めやうべ此の情とちよぎふにて終  
死スカタキ次第こそひ。ままでへば天下の教と併く日教と  
しゆつまども。既よ生ひ遡てすがき。嘗く作さくまへ。行年も前  
在のうすふと父兄歿むをとまへて。やもひど繪と絵と押さへ。  
中納言なかなごんを候もう多ひの御すとくらべ推挾すいせきをとひて休て至年三十  
けるの今貌うらわ後うしろをまぐらへて社へ。御のうさうの年八万宗の秀臣  
御子を高たか近ちか年のとくと下しもの年長じよじょうハ中ちゆう力ちから年。とくと氏  
姓うりのなまけの名なま字じをあ称めいする御ごとくとくとけそ。とくとくと  
とと作さくます。紙と硯ととさせく。御文細ごぶんさいとあそびて傳つたはく  
あ幼おさな年ねへ書かてうろへと作さくます。かく写うつてうるをとどめ。あるとくの

なる山陽小ねのじよりうと、市裏いちりと等そなてまちをめほのよ  
居ゐ有あせうひく又況またとおあまあま、神世じんぜの頃ごとぞさくらる  
通送生死つうそうじみつ 四十二年よんじゅうに 山河さんか一革いつか 天地洞然

六月十九日よ某もしとちくと事ことと拵そなて又辭さよと奉さなてすとぞ  
因いん鬼き立たつ席せき左さの附つき傍わきとらへとらへとらへとらへとらへとら  
つも疎さうなり。へりりりと遺骸いがいを旅たびく。攝せきくの御ご服ふくとゆく  
うと着きたる。近侍きんしと絶ぜつたの清純せいしんとす。晝夜しゆがいの勤きん勞ろうとす  
とす。れども身みと罪ざい進すすて漏もす。君きみの恩寵おんぢゆも深ふかく。終すく  
まづいゆと聲こゑ王おう連つづくとへり。身みと命みこととすと推す重じゆ  
らまくとへり

嗚  
呼

